宗教改革四〇〇周年記念再考

小柳敦史

一、はじめに

H・ボルンカムの古典的研究のタイトル『ドイツ精神史の鏡の中のルター』に表されているように[1]、ルター像は時代状況や思想家の関心を反映してきた。とりわけ、宗教改革から百年ごとの節目には、集中的にルターについての言説が生み出されてきた。二〇一七年の宗教改革五〇〇周年においては、ルターの業績や宗教改革という出来事をエキュメニズムの観点から再評価することが、今回の宗教改革記念年を特徴づける関心の一つであると言えるだろう[2]。それでは、百年前の宗教改革四〇〇周年はどのように祝われ、そこでルターはどのように語られたのだろうか。それを明らかにするために、本稿ではまず第二節で、宗教改革四〇〇周年を迎えたドイツの時代状況を確認する。それは第一次世界大戦の開戦から四年目であり、第一次世界大戦の時代に、ルターがドイツの英雄として祭り上げられたことはよく知られている[3]。しかし、一九一七年の宗教改革記念四〇〇周年記念の際には、そういった「ドイツの英雄」というルター像に対する反対意見も少なからず存在していた。そこで第三節では、ルターとドイツを結びつける主張に反

対するプロテスタント神学者たちが戦争に対してどのような姿勢をとっていたかを考察する。さらに、第四節、第五節では従来の研究ではあまり注目されてこなかった、「教会外のキリスト教」、あるいは「教会外の宗教」にとってのルターに注目する。なぜなら、一九一七年のドイツの宗教状況において既存の教会に代わり「教会外の宗教」が存在感を増しており、そこでもまた宗教改革四〇〇周年にあたってルターについての言説が生み出されていたからである。

二、祝われ損なった記念祭

一九三三年に、雑誌『キリスト教世界』は「記念祭（Jubiläen）」という記事を掲載した。

私たちの時代は記念祭好きである。そして、私たちはここ数年の間に、いわゆる宗教改革記念祭を何回も祝ってきた。一九一七年の論題掲示記念祭、一九二一年のヴォルムス帝国議会記念祭、一九二九年のシュパイアー・プロテスト記念祭、一九三〇年のアウグスブルク信仰告白記念祭、一九三一年のツヴィングリ追悼祭。一九一七年の記念祭は当然ながら、戦争の苦境に悩まされていたし、プロテスタント的ドイツ帝国に誇りを持つ多くの人にとっては、かのルター祝祭の日々のまさしく最中にあって、カトリックの人間――中央党の指導者でありバイエルン首相だったヘルトリンク伯爵――が初めて帝国宰相となったことは、気落ちすることであるように思われた。しかし、これは政治的な状況の特徴であった。それから何年かは、全ドイツの人間は祝祭を祝おうという気分にはならなかった。一九二一年一月十八日にヴェルサイユでの帝国誕生宣言から五〇年が経った時、『ヒルフェ』誌にある論説が載った。それは、「我々はいかにして祝祭を我慢すべきなのか」というものである。それでも、ま

さに困窮と政治的圧迫の時代にある民族は、もっと良かった過去の思い出に名誉を与え、そこから現在への耐久力と、未来への希望を獲得するのである。私たちの民族にとって、かつてそのような意味を持っていたのは、一八五九年のシラー生誕一〇〇年祭であった。[4]

ここで記憶も新たに記述されているのは、一九一七年の記念祭がドイツ社会の苦境の中で迎えられたこと、そして、一九一七年以降にも一連の宗教改革記念行事が続いたことである。なお、この文章が書かれた一九三三年は、ナチスが政権を握り、ドイツ的キリスト者の主導の下でルター生誕四五〇周年を記念する「ドイツ・ルター記念日（Der Deutsche Luthertag）」が祝われた年であった。

まず、一九一七年のドイツ社会が置かれていた苦境がどのようなものだったか確認したい。一九一七年は第一次世界大戦の開戦から四年目の年である。前線では塹壕戦が続く一方、銃後の社会は一九一六年から一九一七年にかけての冬にいわゆる「カブラの冬」を体験し、困窮を深めていた。[5] そのような状況を打開すべく、二月には無制限潜水艦作戦が開始するも、それを一因として四月にアメリカがドイツに宣戦布告をしたことで、西部戦線の戦況は厳しくなることが予想された。一方、三月にはロシアで革命が勃発したことで、ロシアはその後第一次世界大戦から離脱することになる。内政面においては、いわゆる「城内平和」はすでに亀裂が入っており、帝国宰相ベートマン＝ホルヴェークは辞任へと追い込まれた。その後、短期間宰相を務めたG・ミヒャエリスに代わり十月三十一日に宰相に就任したのが、右で言及されていたヘルトリンク伯爵だった。一九一七年はこのように、ドイツにとっての「転換の年（Epochenjahr）」となった。

このような戦時下の状況の中で、宗教改革四〇〇周年を盛大に、それも国際的な祝祭として祝うことは不可能であっ

た。一九一七年には、一八一七年のヴァルトブルク祭のような、その年を象徴する祝祭は開かれなかった。そこで、発案されたのが、一九二一年のヴォルムス帝国議会四〇〇周年記念祭だったのである。D・ヴェンデブール（Wendebourg）によれば、「国際的、全プロテスタント的祝祭になるはずだった一九一七年の四〇〇周年記念祭が、世界大戦のためにドイツの範囲だけに限定されざるを得なくなった時に慰めとなったのは、戦争の――もちろん勝利での――終結後に大きな祝祭をして埋め合わせをしよう、そして、それはマルティン・ルターのヴォルムス帝国議会到着の記念日にやろう、という考えだった」[6]という。現実にはドイツは戦争に敗れ、被占領地域となったライン川左岸に位置するヴォルムスで挙行されたヴォルムス帝国議会四〇〇周年記念祭は、戦後の混乱と緊張を反映するものになった。[7]

先ほど参照した『キリスト教世界』の記事に書かれているように、一九二一年以降も宗教改革記念行事は開催され続けた。一九一七年の宗教改革四〇〇周年記念祭が不十分にしか祝われなかったのは、戦時中のドイツの苦境の故であったが、この記事が当時の心情を反映しているのなら、宗教改革記念行事が繰り返し求められたこともまた、この時代のドイツ社会が困窮していることの現れであった。宗教改革四〇〇周年記念の意義を総体として考察するには、一九一七年だけではなく、その後の一連の記念祭まで視野に入れる必要があるだろう。

三、リベラルなプロテスタンティズムの試金石としての宗教改革四〇〇周年

しかしながら、本発表においてそうした記念祭の全てを論じることは不可能であり、一九一七年の宗教改革四〇〇周年記念祭に議論を集中したい。ハイライトとなるような祝賀祭は行われなかった一九一七年であるが、その代わり

にこの年には宗教改革やルターに関する著作物が大量に刊行された。それゆえ、「祝祭ではなく、著作物の産出がこの記念年の固有な特徴[8]」であり、「宗教改革記念はとりわけアカデミックな事柄となった[9]」と見なされる。このような、大学人を中心として生み出されたルター言説において支配的だったのが、戦意高揚のための「ドイツ的ルター」の像であった。M・グレシャート（Greschat）によれば、一九一七年の宗教改革記念に際して、ドイツのプロテスタンティズムの主題は「ドイツ市民層の好戦的でナショナリスティックな願望に飲み込まれた[10]」。

しかしながら、ナショナリスティックなルター像を提示する主流派に同調しない立場も存在したし、これまでの研究においてそうした立場に関心が向けられていなかったわけではない。M・ラーデやO・バウムガルテンといったリベラルと目される神学者たちが、ルターと戦争を切り離そうとしたことは多くの論者が指摘することである。C・アルブレヒト（Albrecht）によると、「リベラルな神学者とは、一般的になっていた、ドイツの英雄へとナショナリズム化され、定式化されたルターに対抗して、宗教改革者たちの宗教的モチーフの中の文化批判的含意を思い出させ、それによってプロテスタンティズムが理性の共和主義者へと転換する準備をした者のことだった[11]」という。いわゆるリベラルな神学者たちも戦争開始時には「一九一四年の理念」と自らを一体化しており、好戦的でナショナリスティックな高揚感に捉えられていた。しかし、宗教改革四〇〇周年を機に、「彼らはドイツ的ルターという一般的になっていたイメージから離れることで、以前の政治的選択からも離れ、自己修正を行った[12]」というのである。

「理性の共和主義者（Vernunftrepublikaner）」とはF・マイネッケの発言に由来する、ヴァイマール共和国を支持した知識人たちの呼び名である。したがって、アルブレヒトの主張は、第一次世界大戦の敗戦後に生まれるヴァイマール共和国に協力する知識人たちの姿勢の萌芽を、戦争中の一九一七年の時点で見定めようとするものである。その試

みは挑戦的かつ興味深いものではあるが、少なくとも二つの点でより慎重な考察を必要とするように思われる。

一点目は、「理性の共和主義者」という常套句を使用することの問題である。この言葉が含意しているのは、ドイツ帝国の敗戦とヴィルヘルム帝政の終焉に伴う共和国の成立は、折り合いをつけざるを得ない現実として、共和国を支持する知識人たちによって理性的に受け入れられたということである。このような「理性の共和主義者」の姿は、「心情の君主主義者」であったマイネッケ自身には当てはまるものであるだろう。しかし、マイネッケの自己理解のために用いられた言葉を、その他の思想家に適用することには慎重な考察が求められる。とりわけ、プロテスタント神学思想史の問題として考えた場合にはなおさらである。なぜなら、「理性の共和主義者」論を採用することは、共和国を支持した神学者たちは神学的な判断ではなく、時代の変化への現実的＝理性的な妥協として共和国を支持したということを意味するからである。

二点目は、リベラリズムに関する問題である。アルブレヒトが「リベラルな神学者」を語る際に、宗教的リベラリズムと政治的リベラリズムの関係が整理されておらず、その結果、当時の支配的なルター像への批判が、戦争支持のナショナリズムへの批判に直結したかのような議論になっている。この時代のドイツにおけるリベラリズムについて論じるには、宗教的リベラリズムと政治的リベラリズムのそれぞれについて、慎重な分析が要求されるだろう。仮に当時の文脈において、領邦教会制を前提とする保守的ルター派に反対する姿勢を神学的リベラリズムと呼び、ドイツの帝国主義的な戦争政策に反対する姿勢を政治的リベラリズムと呼ぶことが可能であるとしても、両者は必然的に結びつくわけではない。

これら二つの問題はいずれも、ヴァイマール共和国成立後の思想状況まで視野に入れて詳細に検討すべきテーマであり、その全体を一挙に扱うことはできない。そこで、本稿ではそのような課題の解決に向けた一助とすべく、M・ラーデ、E・トレルチ、そしてK・ホルという、一九一七年の時点で「ドイツ的ルター」に異を唱えた三人の神学者を具体的な事例として取り上げ、彼らの戦争への態度を確認したい。

雑誌『キリスト教世界』の編集者だったラーデは、一九一七年にはルターや宗教改革記念に関して数多くの論考を掲載し、また自らも論説や書評を執筆した。宗教改革記念日が終わった十一月十五日付の一九一七年第四六号の巻頭に、ラーデは「ルターはもうたくさん？（Zu viel Luther?）」と題した文章を書いた[13]。そこでは、神学者や教養層、若い学者たちの間で、ルター記念や宗教改革記念が多すぎるとの声があることが報告されている。それに対してラーデは、確かに「ここそこで人工的で過剰な騒ぎがある」ことを認めた上で、もっと深くルターの人格と信仰を祝うべきだと述べる。ラーデにとっては、ルターをドイツ性と結びつける言説も「人工的で過剰な騒ぎ」の一つであっただろう。ルターのドイツ性を称揚した代表的な書物であるH・v・シューベルトの著作に対する書評でラーデは「ルターの重心は、彼のドイツ的気質やドイツ的感性、ましてやドイツ的振る舞いにあるのではなく、彼の信仰、彼のキリスト教にある[14]」と断言する。このように「ドイツ的ルター」を拒絶するラーデは、時同じくして『キリスト教世界』誌上で休戦を訴える記事を繰り返し掲載することで、協調と和解による平和を求めるための開かれた場を提供していた[15]。こうして、「一面においてラーデは〈ドイツの戦争神学〉の代表者とみなされた[16]」という開戦当初の立場から、神学面でも戦争への姿勢においても自己修正を果たしており、ラーデはアルブレヒトの図式に合致しているように見える。

トレルチもまた、一九一七年の宗教改革四〇〇周年記念に際して、ルターとドイツ性を切り離すことを主張した。

「宗教改革記念についての真剣な考察」[17]と題された論考において次のように述べている。

われわれは、彼（ルター）の本性の中に何よりもドイツ的なものを考慮に入れるということも望まない。たとえ、ルターから出てくるドイツ的なものが力強く、感動的であろうとも、である。それは重要な事柄ではない。重要なのは、ルターの福音である。すなわち、魂一般や魂の共同体にとっての意義における、ルターの宗教的な説教である。[18]

ラーデと同様に、トレルチもまたルターをドイツ性からではなく、その宗教性から理解することを求める。佐藤真一によると、一九一七年の『スイス誌』(*schweizerische Zeitschrift*) にトレルチが匿名で書いた論文では、「ルターを国民的なシンボルとして賛美しようとした人々は、彼の宗教を正しく理解することができなかった」と述べられているという。[19]ここには、西欧精神とドイツ精神との比較において「ドイツ的自由」の優越性を称揚していたトレルチの姿[20]はない。

しかし、戦争に対する姿勢を見ると、一九一七年時点でのトレルチには、相当の揺れがあることが確認される。一九一七年十月にも、Uボートについて「新たな素晴らしい兵器」と呼んでいたし、[21]一九一八年になってもフランス領併合についてトレルチの発言は一貫性を欠いているように思われる。[22]デモクラシーの擁護者というトレルチの立場は、一九一七年に設立された「自由と祖国のための国民同盟」(Volksbund für Freiheit und Vaterland) の創設に加わり、ナショナリスティックに戦争継続を訴えた「祖国党」(Vaterlandspartei) との対決の中で、徐々に確固たるものになっていったと思われる。しかし、一九一七年の時点でのトレルチがどれほど明確に戦争続行に反対していたか断言することは困難である。

K・ホルがルター・ルネサンスの端緒を開くことになる、一九二一年に出版した論集[23]の一部をなしている論考「ルターは宗教のもとで何を理解したか」はもともと一九一七年の宗教改革記念講演であり、同年に単著としても出版されていた[24]。この論考の主たる論点は、ルターの信仰は個人の良心と責任において神と向き合うものであって、神と合一することを目指す神秘主義とは異なるということであるが、最後の二段落にはルターの宗教性はドイツに限定されるものではないという但し書きが、いささか唐突に置かれている。

宗教のこの理解は、際立った意味でドイツ的なものなのだろうか。ルターの宗教はドイツ的宗教なのだろうか。確かに、個人的な責任を負う勇気、究極的なものへと向かう決意、英雄的なものと繊細なものに対するバランスのとれた感覚、概観の力、あらゆるものに届く心の温かさ、そして、ぎこちなさや、良心の圧迫によって初めて行動へと押しやられる憂鬱への傾向もまた、ドイツ的である。

しかし、われわれがルターをわれわれのためだけに利用するとしたら、それはわれわれの側の自己顕示であると同時にルターを見くびることでもある。すでに始めの数年のうちに、ルターの言葉はドイツの境界をはるかに超えて進んでいった。オランダ、イングランド、フランス、イタリア、スペインまでも、至るところで人々を目覚めさせながら。この単純な事実が証明しているのは、宗教についてのルターの解釈は、それは最も内的なものから生み出されたものなので、人間を人間として感動させるということである。ルターはわれわれにのみ属するのではなく、人類に属している。そしてそれゆえにわれわれは、ルターの業績が人類のもとにとどまるだろうと安らかに確信するのである[25]。

ホルもまたトレルチと同様にルターの個人的な資質にドイツ的なものを認めるが、宗教改革を実現したルターの「宗

教」はあくまでも普遍的なものであることが強調されている。「トレルチ-ホル論争」として知られているように、トレルチとホルはヨーロッパの精神史におけるルターの位置づけ、特に近代社会との（非）連続性を巡って厳しく対立する。[26] しかし、ルターの宗教性が深く個人の内面に根ざしており、それゆえに普遍性を持つという理解は対立の前提として共有されており、それは「ドイツ的ルター」に対抗するものであった。[27] G・マローンは、「リベラル」な神学者たちは「〈ドイツ的〉ルターからきっぱりと距離をとったのみならず、同時に〈神学的〉ルターを本来のルターとして発見した」と述べるが、[28] ホルもまたそのような神学者たちの一員であったと言える。

それでは、ホルは戦争についてどのように考えていたのだろうか。「ドイツ的ルター」への反対においてはラーデやトレルチと同じ立場を取っていたホルは、戦争への姿勢においては彼らと一線を画していた。「ハルナック、トレルチ、オットー・バウムガルテンや他の自由主義神学者たちが、開戦時にはドイツの勝利の熱狂的な説教者だったにもかかわらず、戦争の最中にその意見を変え、講和による平和を求めていることを、ホルは節操のないことだとみなした」[29] と言われている。バウムガルテンから受けた一九一八年の夏の福音主義社会協議会（der Evangelisch-Soziale Kongreß）での講演依頼を断った際にホルは、「私は決然と祖国党に立脚しています」と書き送った。[30] その後、十月の終わりには『『キリスト教世界』友の会」（der Verein der Freunde der Christlichen Welt）を脱退し、共和国の誕生を支持する「リベラル」な神学者たちと明確に袂を分つこととなる。

以上、ラーデ、トレルチ、ホルという限られた例からではあるが、次のように言ってよいだろう。一九一七年の宗教改革四〇〇周年記念は、ルターをドイツ性の観点から理解する当時のルター派教会の公式見解への批判的な態度決定を促した。この意味では、宗教改革四〇〇周年記念は神学的リベラリズムの試金石となった。しかし、保守的ルター

派への反対は、戦争への反対を意味するわけではなかった。ラーデは一九一七年の時点で明確に戦争の終結を訴えていたが、トレルチには戦争の継続を容認するような発言も確認できる。さらに、ホルはラーデやトレルチから距離をとり、戦争の継続を支持する側に立っていた。したがって、宗教改革四〇〇周年記念における「ドイツ的ルター」への反対表明が、必ずしも「理性の共和主義者」を準備したわけではない。

四、宗教改革四〇〇周年記念が問いかけるもの

「ドイツ的ルター」の称揚が戦時におけるナショナリズムの反映であるように、ルターの宗教性への関心は、宗教改革から四〇〇年が経過した一九一七年現在のドイツの宗教性への関心に根ざしている。トレルチの論考「宗教改革記念についての真剣な考察」の課題はまさしく、「宗教改革記念がわれわれに問いかける」問いとして「今日のドイツの宗教は一体どこにあるのか」を考察しようとするものであった。ただし、トレルチによると「これは気が滅入る問いである」という。[31] なぜ、同時代の宗教事情を診断することが、気が滅入る作業なのだろうか。

まず確認されるのは、既存の教会制度の内部だけでは、この時代の宗教性を語ることができないということである。とはいえ、トレルチは教会離れを単純に嘆いているわけではない。教会から離れた宗教性、すなわち「教会外の宗教(die außerkirchliche Religion)」のあり方にトレルチは不安を感じているのである。

しかしながら、苦々しく、不安にさせるのは、「教会外の宗教」そのものの散漫で、不明確で、憧憬と批判、革新への欲望、ディレッタンティズムが混ざり合った内的な状態である。深い欲求とわずかな明確性、これこそがそ

の性格である。(中略)それは一面において、不誠実な適応と漠然とした同化の間を、他方では完全な、そしてわざとらしい無知と無理解の間を揺れ動いている。ここに、ドイツの教養――どんな階級でも関係ない――にとっての重要で真剣な生の問いがある。宗教改革記念は、これをわれわれのうちに呼び起こしたのである。[32]

教会の神学者たちの公式ルター像に異を唱え、既存の教会にはもはや宗教を担う力はないと考えるトレルチではあるが、あまりに不定形な「教会外の宗教」に全面的な信頼と期待を寄せることはできなかった。トレルチは「ヨーロッパ的な生はキリスト教と分かち難く一体化しており、教会外の、あるいは教会を超えた宗教においても、その宗教の本質的な根はキリスト教にある」[33]と判断し、ヨーロッパ的な生のあり方に対するキリスト教の意義への信頼を放棄しない。ヨーロッパ文化が、そして「教会外の宗教」も実際には、キリスト教の伝統に根ざしていると考えるトレルチにとって重要なのは、「教会外の宗教」に含まれる深い宗教的欲求を理解し、受け止めた上で、それをこれからのキリスト教の形成に接続していくことであるだろう。トレルチの結論は以下の通りである。

教会の宗教はもはやドイツの精神性の宗教ではない。この事実は疑いようがない。しかし、まさにこの教会は理解と尊敬、思慮深い尊重を求めている。人は、まさしく教会に対する賛成と拒絶の中に、明白な方針を見出さざるを得ない。その方針がわれわれに、私たちの民族の生の偉大な歴史的な財産との結びつきを保持し、同時にまっすぐな誠実さを証しすることを可能にするのである。そして、われわれ自身の生と思考――それが教会から近かろうと遠かろうと――のために何よりもわれわれが求めるのは、深さや健全さ、率直さ、温かさ、ならびにわれわれ自身の思想と言葉に対する責任感である。それは何かを築きあげるものであって破壊するものではない。それは信仰を獲得するものであって、信仰をもてあそぶものではない。このような、信仰の問いへの道徳的な真剣

さの深まりこそが、宗教改革記念の本来的な要請であるように思える。（中略）われわれは絶えず様々な方法、そして様々な意味で目標へと接近するが、その際にわれわれの宗教に関わる歴史の遺産をなおざりにしてはいけないし、常に影響と責任を心がけなくてはならない。[34]

先に見た「教会外の宗教」への評価は、ここでトレルチが要求している内容に見合うものではない。ルターをナショナリズムのために乱用するような現状の教会の宗教的無力を認めつつも、その事実によって教会制度そのものを全面的に手放してはいけないというのがトレルチの考えである。より具体的な構想としては、『社会教説』の末尾で述べられていた、教会／分派／神秘主義の社会学的三類型の相互浸透としての「国民教会（Volkskirche）」がその担い手となるだろう。[35]

近代社会の宗教状況に常に目を配ってきたトレルチが、保守的なルター派教会のあり方や神学に対する批判的な発言をすることも、「教会外の宗教」に注目したのも一九一七年が初めてというわけではない。それでも、「教会外の宗教」やそれに類する宗教運動へのそれまでの言及と比べると、宗教改革記念に際しての発言は、この論考が発表された場が『クンストヴァルト』という「教会外の宗教」に親和性の高い媒体であることを差し引いても、そこに含まれる宗教的欲求の真正性の承認において際立っているように思われる。[36] もちろん、トレルチにとって「教会外の宗教」は近代ドイツ社会の宗教問題の解決ではなく、問題そのものであったが、それは現状のキリスト教会よりも重大な問題であった。宗教改革四〇〇周年記念はそのことをはっきりと認識させる契機となった。

五、「教会外の宗教」にとってのルター

宗教改革四〇〇周年のドイツにおいて「教会外の宗教」の重要性が高まっていたのなら、「教会外の宗教」が宗教改革四〇〇周年をどのように迎えたのかは注目に値する。そこで、編集者ディーデリヒスの下で「教会外の宗教」を求める運動を展開していた雑誌『タート』(*Die Tat*) を見てみたい。

『タート』は一九一七年七月号の「宗教特集」(Religiöses Sonderheft) に加え、十月号にも宗教改革に関連する論考を一挙に掲載した。十月号の巻頭に置かれた「宗教改革四〇〇年」にディーデリヒス自身の見解が述べられている。[37] ディーデリヒスはルターがカトリック教会を徹底的に批判したことを積極的に評価する一方、その後のプロテスタント教会は宗教改革の後継者たり得ていないと判断する。

しかしながら、たとえルターが新たな形式を生み出したのではなく、かつては完結していた宗教的発展の硬直した容器を破裂させただけだとしても、ルターが残した課題は継続されたが、もちろん教会の外でのことである。ルターによって、現世的な霊性が私たちにもたらされた。これは、生の聖化において神を捉えるもので、人間の自己責任感がその土台の上にある。それは、思弁的であるというよりも行動的なゲルマン的神解釈であり、超感性的なもののイメージを現実の姿から獲得し、感情移入から取り出して理念としての有機的なものへと成長させる。ルターの後継者は、同じことを繰り返すだけの教会の神学者たちではなく、われわれのドイツ古典主義の時代の思想家たちである。もちろん公式なプロテスタンティズムは彼らについて何も知らないのだが、ドイツ古典主義に属する人たちの宗教とは、アルトゥーア・ボーヌスの表現にしたがえば、「教養人の秘密宗教」なのである。[38]

『タート』に集まった、あるいはディーデリヒスによって集められた著述家たちの宗教的立場や関心は様々であり、[39]そこに統一的なルター理解や宗教改革評価を見出すことは難しい。それでも基本的な方向性は上記のディーデリヒスの見解に含まれているように、（一）教会批判者としてのルター理解、（二）ルターにおける生の宗教性の発見の重要性、（三）（時にゲルマン性と結びつく）知識人宗教としての新たな宗教運動の必要性、といった内容にまとめられるだろう。一五二五年以前のルターが高く評価され、[40]ルターの内的生における良心の重要性が論及され、[41]従来のキリスト教とは異なる宗教的力が希求されている。[42]教会という組織を前提とせずに個人の責任における信仰としてルターの宗教性を解釈する発想は、ドイツ・プロテスタント主流派のルター理解に反対する神学者たちと共通するものであった。

しかし、そのような宗教性に「ゲルマン的」なルーツを認め、ルターとドイツ古典主義の宗教との密かな連続性を強調することで、保守的ルター派とは異なる経路でルターを民族主義へと結びつける傾向を帯びていることも見逃し得ない。

六、まとめ――プロテスタンティズムと「教会外の宗教」――

トレルチは一九一七年という時代状況において、「教会外の宗教」のうちに宗教に対する深い欲求を認めていた。ディーデリヒスもまた、プロテスタントの中でもリベラルな神学者とは共通の問題に取り組んでいると感じていたようである。一九一七年九月六日付で、ディーデリヒスはかねてから交流のあったラーデへと手紙を送った。

敬愛するラーデ様、

あなたがおいでになれないことは残念です。しかし、それだけ一層、三度目の集まりにはあなたがお越しくださるものと私は当てにしています。私は、目下の私たちの状況を悲観的に見ています。この状況は、私たちの節操のなさと追従主義の帰結なのです。戦争前、誰も皇帝の素人政治に不満を言いませんでした。そして私たちは今や、必然的に来りつつある経済的な戦争が最も都合の悪い境遇の下で遂行されること、その際に私たちが多くの血を流さねばならないこと、最終的には社会の破滅へといたることの尻拭いをさせられるのです。この冬にはきっと、私たちの状況がさらにどれほど悪くなるかという多くの予兆がもたらされるでしょう。――しかし、それでも私たちは意気消沈すべきではありません。なぜなら、人間にとって状況が悪い時にこそ、あらゆる精神的なものは最もよく成長するからです。近日中に、私の論文の校正版をあなたにお送りします。その中で私は、プロテスタンティズムを切り倒しています。驚かないでください。それは安直な批判ではなく、私なりの再建なのです。それについてあなたが言ってくれることは、私にとって非常に興味深いものになるでしょう。私は自分の思いきった意見について、最初から証拠により基礎固めをするのではなく、単純な告白のように論じました。私としては、自分の論文の中で歴史の輪郭を見誤っているとは思いません。たとえ、私が宗教改革についても、クエーカーやピエティスムについても、根源から把握しているわけではないとしても。[43]

ディーデリヒスは、戦況がより悪くなることを見越した上で、そのような苦境の中でこそ精神的なものは成長できると述べ、そのためにプロテスタンティズムを切り倒し、再建する必要があると訴える。ラーデがこの手紙にどう返答したかは分からないが、少なくともディーデリヒスは、ラーデが自分と同様に時代状況を診断し、宗教の再建とい

う課題に理解を示してくれるものと見込むことができた。トレルチが、自身としては教会という形式を尊重しつつも「教会外の宗教」の持つ真理契機を認めていた一方で、「教会外の宗教」の一員であるディーデリヒスは、保守的ルター派に批判的なプロテスタント神学者と問題関心を共有していると感じていたのである。

戦争の終結と革命によりヴァイマール共和国が誕生した暁には、共和国を支持する神学者たちとディーデリヒスは異なる路線を歩むことになるだろうし、「ドイツ的ルター」に反対した神学者の中にもホルのようにデモクラシーに賛同しない者もいた。一九一七年に迎えた宗教改革四〇〇周年は、帝政ドイツとその戦争が長引き古い体制にほころびが見えつつあるが、かと言って新しい社会がまだ始まってもいないというタイミングであった。だからこそ、帝国と一体化したドイツ・プロテスタンティズムの公式化されたルター像への批判は、戦争への姿勢においてはそれぞれ違いがありながらも共通して保守的ルター派に対して距離をとるプロテスタント神学者たちの内部だけではなく、「教会外の宗教」とも共有されていたのである。宗教改革四〇〇周年記念とは、ルターをドイツの英雄として祭り上げる言説が大量に流布した裏側で、プロテスタンティズムと「教会外の宗教」を接近させるという側面も持っていたのである。

註

(1) Heinrich Bornkamm, *Luther in Spiegel der deutschen Geistesgeschichte*, (zweite, neu bearbeitete und erweiterte Auflage), Vandenhoeck & Ruprecht, 1969.（ハインリヒ・ボルンカム、谷口茂訳『ドイツ精神史とルター』聖文舎、一九七八年）。

(2) 例えば日本基督教学会第六十五回学術大会の特別講演のテーマは、「宗教改革とエキュメニズム：その到達点、課題と展望」であった。

(3) 「ドイツの英雄としてのルター」というイメージについて

は以下の文献にまとめられている。James M. Stayer, *Martin Luther. German Saviour*, McGill-Queen's University Press, 2000.

(4) Hermann Mulert, Jubiläen, in: ChW 1933, Nr. 21, Sp. 969f.

(5) 「カブラの冬」については以下の文献を参照。藤原辰史『カブラの冬――第一次世界大戦期ドイツの飢餓と民衆』人文書院、二〇一一年。

(6) Drothea Wendebourg, Das Reformationsjubiläum von 1921, in: ZThK 110 (2013), S. 317.

(7) 一九二二年のヴォルムス帝国議会四〇〇周年記念祭については上記のヴェンデブールの論文が詳しい。

(8) Gottfried Maron, Luther 1917. Beobachtungen zur Literatur des 400. Reformationsjubiläums, in: ZKG 93 (1982), S. 179.

(9) Peter Cornehl, Das Reformationsjubiläum im vierten Kriegsjahr 1917, in. Pastoraltheologie 104. Jg. (2015), S. 148.

(10) Martin Greschat, Reformationsjubiläumsjahr 1917, in: Wissenschaft und Praxis in Kirche und Gesellschaft 61. Jg., Heft 10 (Oktober 1972), S. 424.

(11) Christian Albrecht, Gewalt und Gewalterfahrung im Spiegel der Luther-Rezeption des Reformationsjubiläums 1917, in: Christoph Bultmann/ Benedikt Kranemann/ Jörg Rüpke (Hrsg.), *Religion- Gewalt-Gewaltlosigkeit*, Aschendorff Verlag, 2004, S. 36.

(12) Ibid. S. 45.

(13) Martin Rade, Zu viel Luther?, in: ChW 31, 1917, Sp. 799.

(14) Martin Rade, Rezension von: Hans von Schubert: Luther und seine lieben Deutschen (1917), in: ChW 31, 1917, Sp. 753. この文章は上記の Albrecht および Cornehl の論文でも引用されている。

(15) Peter Cornehl, ibid. 145.

(16) Christoph Schwöbel, *Martin Rade. Das Verhältnis von Geschichte, Religion und Moral als Grundproblem seiner Theologie*, Gütersloher, 1980, S. 187.

(17) Ernst Troeltsch, Ernste Gedanken zum Reformations-Jubiläum, in: Deutscher Wille. Der Kunstswarts 31. Jahr. Der Kunstwart und Kulturwart 31, 1917, S. 87-91.

(18) Ibid. S. 87f.

(19) 佐藤貢一『トレルチとその時代』創文社、一九九七年、二五八頁。

(20) Vgl. Ernst Troeltsch, *Deutscher Geist und Westeuropa. Gesammelte kulturphilosophische Aufsätze und Reden*, (hrsg. v. Hans Baron), J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1925.

（エルンスト・トレルチ、西村貞二訳『ドイツ精神と西欧』筑摩書房、一九七〇年）。

(21) Friedmann Voigt, Deutsche Freiheit und das europäische Projekt der Moderne. Ernst Troeltsch und der Erste Weltkrieg, in: Joachim Negel/ Karl Pinggéra (Hrsg.), *Urkatastrophe. Die Erfahrung des Krieges 1914-1918 im Spiegel zeitgenössischer Theologie*, Herder, 2016, S. 281-304.

(22) 一九一八年時点でのフランス領併合に関するトレルチの発言の揺れと、それに対する同時代人の反応については以下を参照のこと。佐藤、前掲書、二六一―二六三頁。

(23) Karl Holl, *Gesammelte Aufsätze zur Kirchengeschichte Bd. I: Luther*, J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1921.

(24) Karl Holl, *Was verstand Luther unter Religion?*, J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1917. ただし、一九二一年の論集に収められた際にはかなりの加筆修正が加えられている。

(25) Ibid. S. 38.

(26) いわゆる「トレルチ―ホル論争」についてはBornkamm、前掲書、第一四章および Sonia A. Riddoch, *The Ernst Troeltsch- Karl Holl Controversy And the writing of reformation history* (Dissertation), Queen's University, Ontario, 1996.を参照。ボルンカムはルター解釈の深さにおいてホルを高く評価する一方、リドックはルター・ルネサンスとドイツ的キリスト者の親和性に注意を向け、ホルに対してやや厳しい評価を与えている。

「ルターと、問題含みのドイツ特有の道とが結びつくのはトレルチの責任ではない。(中略)デモクラシーと社会主義、そしてとりわけカトリシズムへのホルのあからさまに否定的な言明と、マルティン・ルターに由来する保守的な社会秩序への彼の賞賛からして、ホルはルター・ルネサンスの単なる「精神的父親」以上の存在である」(Riddoch, p. 396.)。

(27) 個人の内面における宗教性に注目するルター解釈としては、やはり一九一七年に出版されたR・オットーの『聖なるもの』も軌を一にするものである。ボルンカムは『聖なるもの』を第一次世界大戦中のルター研究の中で重要なものの一つと評価する。Bornkamm, ibid., S. 112.を参照。

(28) Maron, ibid., S. 201.

(29) Johannes Wallmann, Karl Holl und seine Schule, in: ZThK Beiheft 4, 1978, S. 26.

(30) 一九一八年六月三十日付のホルからバウムガルテンへの手紙。Wallmann, ibid. より転載。

(31) Ernst Troeltsch, Gedanken zum Reformations-Jubiläum, S. 88.

(32) Ibid. S. 90.

(33) Ibid.

(34) Ibid. 91.

(35) Ernst Troeltsch, *Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen (Gesammelte Schriften 1)*, J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1912, S. 982.

(36) トレルチにおける「宗教的欲求の語法」については以下を参照。深澤英隆『啓蒙と霊性――近代宗教言説の生成と変容』岩波書店、二〇〇六年、五六―六三頁。

(37) Eugen Diederichs, 400 Jahre Reformation, in: Die Tat 9 Jg. (Heft 7), 1917, S. 577-581.

(38) Ibid. S. 579.

(39) 『タート』七月号（宗教特集）と十月号の論文の著者は以下の通りである。「展望」(Umschau) としてまとめられている短い論考について省略する。

7月号：Eugen Diederichs; Ernst Lissauer; Alfons Paquet; Ernst Michel; Arthur Bonus; Rudolf von Delius; Hans Mühlstein; Emil Fuchs; Arthur Drews; Walther Eidlitz.

10月号：Eugen Diederichs; Julius Kühn; August Pfannkuche; Gertrud Prellwitz; Friedrich Gogarten; S. P. Berlage, Alfred Wiener.

(40) Hans Mühlestein, Luther und Zwingli, in: Die Tat 9Jg. (Heft 3), 1917, S. 214-227.

(41) Augst Pfannkuche, Das Gewissen in Luthers Frömmigkeit, in: Die Tat 9Jg. (Heft 7), 1917, S. 589-593.

(42) Arthur Bonus, Vom neuen Mythos, in: Die Tat 9Jg. (Heft 3), 1917, S. 205-213.

(43) この手紙は以下の文献に引用されているものを転載した。Edith Hanke/ Gangolf Hübinger, Von der »Tat«-Gemeinde zum »Tat«- Kreis. Die Entwicklung einer Kulturzeitschrift, in: Gangolf Hübinger (hrsg.), *Versammlungsort moderner Geister. Der Eugen Diederichs Verlag- Aufbruch ins Jahrhundert der Extreme*, Eugen Diederichs Verlag, 1996, S. 310f.

【謝辞】本稿はJSPS科研費JP15K16634の助成を受けたものです。